

Unseen Street

緑川雄太郎

「ブラインド」と聞いてまず思い起こされるのは、ブリューゲルの『盲人の寓話』だ。1568年に制作されたこの絵画は、ブリューゲルの死の前年に描かれている。タイトルの「寓話」が示している通り、この絵画は、盲人が盲人を案内をすれば2人とも穴に落ちるという聖書の寓話を元にしてしている。ビートルズの『アビィ・ロード』のジャケット写真も議論を呼んだが、『盲人の寓話』はさらに複雑な様相を呈している。

「センシング」と聞いてまず思い起こされるのは、「ファントムリム」だ。ファントムリムは、失われた体の一部が、失われたにも関わらずそこにあるように感じられる身体感覚を意味する。ここには知覚の不可解さが現れている。感覚器官が何かを受信して初めて脳がそれを知覚するのか、あるいは感覚器官以外の何かがあるを受信しているのか。現代のセンシングテクノロジーはまだ、この問題を問題だと捉えてはいないようだ。

大歳芽里による『ブラインド・センシング』には、「まだ見ぬ」問題が含まれている。それは現在の人間には文字通り見えないが、人間「には」見えていないというだけかもしれない。

ブラインド・センシングとは何か。試しにChatGPTに尋ねてみる。「ブラインド・センシングとは、一般的に、視覚入力に頼ることなく、デバイスやシステムが情報やデータを収集することを可能にする技術や方法を指す。これには、音、触覚、レーダーなど他の感覚入力を使って環境を認識することが含まれる。視覚だけに頼ることなく周囲の状況を検知する必要がある自律走行車のような状況でよく使われる」。なるほどそうかもしれない。試しに私も応えてみる。「ブラインド・センシングは、視覚情報を遮断した状態で感じられる世界である。大歳芽里によるこのブラインド・センシングは、複数の人たちによって道の上で行われる。そこでは、目を閉じていない者によって、目を閉じた者に、何らかの感知が促される。主に視覚で捉えていたはずの道の世界は、ブラインド・センシングによって異なる次元に変容する」。

ブリューゲルの『盲人の寓話』と大歳芽里の『ブラインド・センシング』の大きな違いは、先頭に立つ者がブラインドではないという点だ。あるいは逆に、目を開いた者は、目を閉じた者の知覚を知ることができないという点において、ある種のブラインドであるかもしれないことを考慮すると、大歳芽里の『ブラインド・センシング』は、現代版の『盲人の寓話』かもしれない。そもそも、ブラインドであるかどうか、ブラインドが何であるかは問題ではないかもしれない。あるいはむしろセンシング、知覚とは何かの方が重要なのではないだろうか。

「ファントムリム」という現象は、「ファントム」が示す通り、科学の外部に位置している。科学的に検証できないものには信憑性はない。ただ、科学の外部を探求することが科学だ。大歳芽里の『ブラインド・センシング』は次の意味で「科学的ファントムリム」かもしれない。『ブラインド・センシング』は一時的に失われた視覚が「見る」世界であり、複雑な実験を通して、ある世界の質感に関する再現性と因果関係を検証している。目を閉じた後の暗がりの世界は、あなたを危険な状態にするだろう。ただそれは決して絶望的な孤独ではないことは明らかだ。そのすぐそばに先導者の目があるからだけではなく、『ブラインド・センシング』を見守る大歳芽里の穏やかな眼差しがあるからだ。あるいはただ、「空が青いから(Because the sky is blue)」だけかもしれない。